

家康の子育て失敗談



愛知教育大学名誉教授

新行 紀一 氏

教育随想

岡崎の教育

月報



平成17年1月1日

1月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
愛知教育大学名誉教授 新行 紀一氏	
この人に聞く	2
「おかざき匠の会」代表 上野 房男氏	
羅針盤	2
国語科指導員	大西 裕子
ふれあい	3
美合小	杉原 知
ペナン日本人学校	松坂 禎文
特集	4
優しさ・ゆとり・笑顔満載 新校舎完成	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
臨海学習 (昭和25年)	
この本を	8

慶長十七年(一六二二年)二月二十六日、駿府城にいた七十一歳の徳川家康は、江戸城の將軍秀忠夫人於江与の方へ、子供の教育について長文の書状を送った。その中で、自身の子育て失敗談を記している。

幼少の者が利口だからといって厳しく躰けないで、成人後は、親の言うことはいうまでもなく、家臣の言うことも一切聞かなくなる。そうになると、国を治めるどころか、自分の身すら立たなくなる。その具体例が、長男信康である。

親は、年若で子供を珍しがり、その上、信康は発育の良くない子であったので、気ままにさせておいた。そのため、成人後に、親の言うことを聞かない人間になってしまった。

成人後にいろいろ言っても、躰が悪かったたので、親を敬わず、何かと

いいわけばかりし、後には、親子喧嘩となつてしまった。

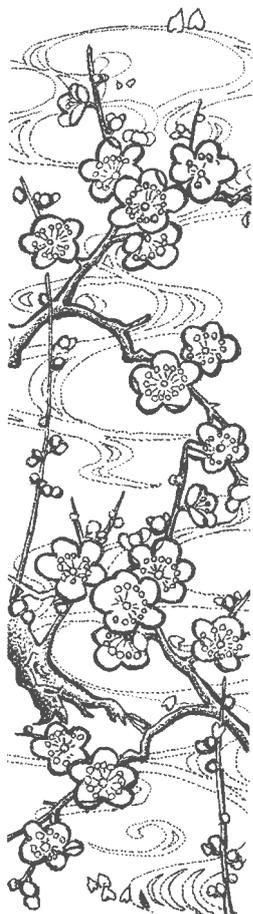
長男竹千代(後の家光)を疎んじ、次男国松(後の忠長)を偏愛した於江与の方へ、十七か条にわたつて子育ての仕方を述べた教誡状ともいべき書状であり、信康自刃後、三十年を経て、親の側からの述懐であるから若干の誇張もある。

永禄二年(一五五九年)三月六日に信康が生まれたとき、家康は十八歳、妻築山殿は同年とも三つ四つ年上ともいう。当時では、特に、若い

親ではないが、虚弱児を甘やかして育てた末に、自刃に至らしめた悔恨は深かつただろう。

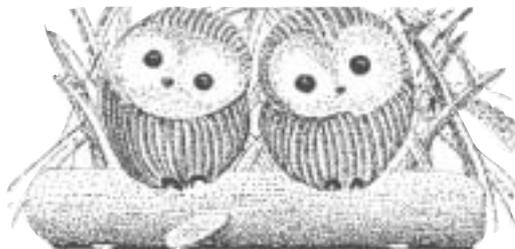
武勇には秀でていたが、気性が荒くわがままで、家臣や領民への氣遣いを欠いた信康は、主君としての器量に不足があつた。妻徳姫(織田信長の娘)との不和から発した織田徳川同盟瓦解の危機克服策が、育て間違えた息子を切腹させることであつたからである。

(しんぎょう のりかず)



この人に聞く

ふるさとシリーズ



岡崎を世界に発信

「おかざき匠の会」代表
上野 房男 氏

愛知万博開幕直後の約一か月間、市民参加プログラム「地球市民村」に「おかざき匠の会」が参加することが決まり、準備が進められている。「万博では、世界中に岡崎の素晴らしさをアピールしたい。」

と語るのは、代表の上野さん。

「おかざき匠の会」とは、岡崎の伝統工芸・地場産業の新たな可能性を求めて、職人や作家が職種を超えて連携し、新しいものづくりを行うことを目的とした団体で、結成四年



目を迎える。会員数は四十三名。

「岡崎には江戸時代から優れた伝統工芸・地場産業があります。でも、伝統にあぐらをかいていると次第に減びてしまう。伝統技術をしつかり守りながら、時代にあった新しい感覚のものを創造していかなければならないと思っています。」

上野さん自身も石職人として精力的に新作づくりに取り組んでいる。

「人形師の栗生さんと協力して、家康人形に一・五キロの御影石を担がせた作品をつくったときは、試行錯誤の繰り返しで、お互い職人同士の技と意地の張り合いです。」

匠の会の新作は、機会あるごとに市内各種イベントやショッピングセンター等で、発表・展示される。さらに、市民にアンケートをとり、そ

の結果を新たな作品づくりに生かしている。市民の感覚を何より大切にしているからだそうだ。また、岡崎の伝統工芸の素晴らしさを実感してもらうために、匠の会のメンバーによる実演を行ったり、その仕事の一部を体験してもらったりする取組にも積極的である。

愛知万博では、こうした匠の会の活動を披露するとともに、岡崎らしさをアピールする様々な企画を考えられている。

「万博でのテーマは『厭離穢土 欣求浄土』。家康公が求めた『命と平和のカタチ』をそれぞれの匠が作品に表現します。」

また、家康とかかわりの深かった朝鮮通信使にちなんで、「韓国伝統工芸匠人会」をパートナーとして、ものづくりも行われる。

「朝鮮通信使の現代版かな。これをきっかけに、国際交流・国際平和に少しでも役立てば……。」

そう語る上野さんの言葉には、新たなものに挑む情熱と、万博での成功を確信する自信が感じられた。

氏 名 うえの ふさお
生年月日 昭和二十四年七月一日
住 所 岡崎市小呂町新志一の一



言葉にこだわり、
読みを深める

国語科指導員 大西 裕子

「うわあ。本物を持ってきたの。」
一斉に前へ駆け寄る子供たち。

A小学校一年生「サラダでげんき」の授業で、野菜が登場したときのことである。大きな皿にどんな順番で野菜が入っていくのか、すといんとんとんと動作化しながら確かめる。たつぷりの野菜が入ったところで、

「これだけ入れればもういらんよね。」
「アフリカゾウがくるよ。」

「じゃあ、何しにくるんだらうね。」
読んでみようか。」

と、課題が提示される。子供の意識の流れが大変スムーズである。

お面を使った役割読みをしたり世界地図で遠さを意識させたりした。そして、「なぜアフリカゾウは急がないといけないのかな」「飛行機で来たのはなぜかな」と発問される。「遠いし、りっちゃんのことも心配だから」「お母さんが病気なので

交わした笑顔

美合小 杉原 知

私のクラスでは、「生田ホタルを追え」をテーマに、総合的な学習の時間に、ホタルの生態や環境のことについて追究している。

先日、ホタルの体の仕組みについて調べているA男が、「幼虫の体の中身を調べたい」と、クラスのみんなに提案した。しかし、「大切な幼虫を殺すのか」などの友達の一言一言に、普段は強気なA男もだんだん元気をなくしていった。それでも観察を続けたいというA男とともに、私は飼育ケースの中を眺めた。

しかし、その答えはすぐそこにあつた。その日の昼休み、クラスの男の子が私の所に息を切らして駆け寄ってきたのである。

「先生。今、幼虫がちょうど脱皮



をしたよ。透明だから中身の観察ができるよ。」

私はすぐに理科室から顕微鏡を用意し、A男を呼んだ。

「すごい。体の中に白い粒々がいっぱい。黒いところは内臓かな。」

A男は夢中になって顕微鏡をのぞきながらつぶやき、しばらくそこから動かなかった。

生田ホタルへの思いをさらに深めたA男は、帰り際に

「今日、家の幼虫の水替えをするんだ。」

と、微笑みながら語りかけてきた。私も思わず笑顔を返した。



悩み相談会

ペナン日本人学校 松坂 禎文

A子は言葉数の少ないおとなしい生徒であった。しかし、書くことは得意で、文章の中では素直に自分を表現できた。そこで、生活日記を重視し、彼女との心のかかわりを深めるようにした。

そんなA子が中間テストの後、



▲ 民族楽器を持つペナン日本人生徒

「自分は何をやってもうまくいかない。自分が嫌になる。」

と日記に書いてきた。そして、ちょうど同じ日、編入して間もないB子も勉強についての悩みを日記に書いてきたので、二人一緒に悩み相談会を開き、それぞれの思いを出させることにした。

すると、二人とも勉強の悩み以外にも、海外で生活するがゆえの苦労など、共通の悩みを持っていた。A子もB子もうなずきながらお互いの話を聞き、共感しあうことよって、それぞれの表情は次第に晴れていった。

そして、次の週、

「先生、今日も悩み相談会ですか。」とA子に明るく話しかけられた。少しづつだが、自信を取り戻しているA子の姿がそこにあつた。

この相談会は今も続いている。

遅いと間に合わないから」と、自分の考えをしつかり発言する。友達への考えに付け加える意見も続く。一年生なりの話し合いが成立している。

「サラダが出来上がっちゃうから」の発言に「出来上がっちゃったの」と、絶妙な切り返して、アフリカゾウがドレッシングをかけるという仕上げ役で登場したことも意識付けすることができた。

終末に、子供たちが書いた手紙は、「アフリカゾウさんって優しいね。りっちゃんさんが心配で急いで混ぜにきたんだね」と、教師の意図する内容を各々が的確に書き表していた。

本時の目標を十分に達成できた要因は次のようだと考える。

この授業で、「はるばる来たアフリカゾウの優しい思いに迫りたい」という教師の願いが明確だったこと。そこへ迫る発問が精選されていたこと。子供がのめりこむ手だてが多数あつたこと。言葉にこだわり、叙述に返る教師の姿勢があつたこと。

国語の授業に限らず、これを本時に教えたいという教師の熱意や教材分析によって子供の目が輝く授業は成立する。その日の給食でサラダを食べて、口々に「りっちゃんみたいにもりもり元気になった」と話す子供の姿があつたという。

新築：常磐中



優しさ・ゆとり・笑顔満載 新校舎完成



新築：梅園小



▲ 多目的教室での学年授業



常磐中

▲ 明るく開放感あふれるロビー



▲ 車椅子はエレベーターで移動



▲ 昇降口に設置されたスロープ

平成十五年四月に常磐中学校、平成十六年十月に梅園小学校の新校舎が相次いで完成した。両校ともエレベーターが設置され、昇降口やトイレなどがバリアフリー化されている。体の不自由な子供たちにも優しく、すべての児童・生徒が快適に生活できるように工夫されている。また、柱の間隔を狭くし

たり、強化ガラスを使用したりするなど、防災対策も万全である。常磐中の多目的教室では、教室と廊下の間の壁を取り払い、少人数指導授業や、学年集会・各種会合に活用されている。

一方、梅園小では、使いやすく明るい雰囲気トイレや、花壇と畑の間を通るように設計された通路など、児童がのびのびと生活するための工夫がなされている。

梅園小



▶ 柱の間を狭めた耐震構造



▶ 花壇と畑の間を通過して登校
◀ 清潔で明るいトイレ





● 教育最新情報

○不登校児童生徒の現況とその対応

八月に文部科学省が発表した前年度の全国の不登校児童生徒数は、約十二万六千人であり、二年連続の減少となった。岡崎市の場合も、平成十四年以降減少しつづつではあるが、減少している。これも、各学校での熱心な取組の成果であると思われる。

しかし、不登校児童生徒一人一人を見つめると、社会環境の変化により要因の特定が困難となり、彼らの対応には、学校だけでは難しい例が増えている。こうしたことから、現在、情報連携とともに行動連携のためのネットワーク事業（SSN事業―岡崎・額田・幸田が連携して不登校対策に臨む）が進められている。



岡崎市における本年度の新たな取組 ・スクールカウンセラーの配置

前年度より三校（甲山・東海・竜南）増え、計十三校への配置となった。週八時間の勤務により、生徒や保護者に対し、計画的にカウンセリングを行うことができるようになった。また、一人の生徒への継続した相談が可能になり、他の生徒や担任の先生との関係を回復していく生徒もあつたという報告がある。

・ハートピア岡崎からの情報発信
ハートピアだよりの継続的な発行により、情報提供の場が増えた。また、多くの先生方にハートピアとの行動連携について、啓発することができている。
・子供と親の相談員活用調査研究
本年度、小学校一校への配置がスタートした。この事業

は、学校生活上の問題や基本的な生活習慣が身に付いていないことに対して、早期の段階での対応が効果的であることから、不登校などの早期発見・早期対応や未然防止に関する調査研究を行うことを目的とするものである。

相談や朝早くからの家庭訪問など、相談員の積極的な活動により、効果的に運用されているという研究校からの声が届いている。

各学校での取組について

不登校増加を防ぐために、各学校で取り組んで欲しいことに「生活の建て直し」がある。生活を建て直すことは、子供たちの自立的成長力、学力低下問題などの解決に大きな力となるが、各種の研究で明らかになっている。

子供の元気を作る元は生活習慣（早寝・早起き・朝御飯）にあることを繰り返し強調し、その重要性を強く認識させた。また、学校・家庭・関係機関が連携して、早期発見・対応を肝に銘じて彼らの支援を進めることが重要である。

● 海外研修報告

第三回岡崎市教員海外研修として、十月十八日より二十七日までの十日間、三名でドイツの二都市を訪問した。各自が研修テーマを持ち、初等中等学校六校を訪問した。

特色ある学校経営

どの学校も一学級二十名ほどで授業がなされていた。「Ich T U W A S !」(私は何かをしましょう)とテーマを掲げ、企業との連携による環境カーを持った学校。移民が多く、語学に力を入れている学校。自然の木材を多く取り入れ、掲示物や学習用具など教育環境を重視している学校など、それぞれの学校が独自の環境作りを心掛けていた。

基礎学校の重要性と実際

初等教育は四年間であり、授業は朝八時から午後一時ごろまで行われる。どの学校も、大変明るく自由な雰囲気を感じられた。授業では、教材教具が個人で利用できるように準備しており、子供たちが協力したり教え合ったりと自主

的に学習する姿が目立った。また、一年生でもしつけが行き届いており、生き生きと発言していた。「教育は学校、しつけは親の役割であり、人間形成の責任は親にある」という言葉が印象に残っている。

個に応じた中等教育の実態

どの子供も真剣に授業に取り組んでいた。目を輝かせているのは、教師も同じであった。PISA調査の反省から、文章を総括的に理解する力や身につくまで繰り返し学習することなど、個に応じてできるように工夫されていた。

「百聞は一見に如かず」を実感し内容ある研修であった。

岩津中 山田 義仁
井田小 寄田加津子
新香山中 高嶽 利行



● 第三十二回教育文化賞授賞式



▲ 教育文化賞授賞式

「教育文化賞」は、岡崎市の教育文化振興に寄与する個人または、団体の優れた業績や、現に続けている研究・活動に対し、顕彰・助成を行う目的で実施している。

今年度推薦された個人・団体は三十三点あり、いずれも永年の地道な努力の積み重ねによる成果が顕著であった。

式典終了後、大リーグのマリナーズ、イチロー選手の父鈴木宣之氏の講演があり、(対談者 大樹寺小学校教頭鈴木純子先生)子育てについての有意義な話があった。

◆ 受賞者 (個人の部)

◆ 新行 紀一 氏

昭和四十三年から岡崎市文化財保護審議会委員、五十三年からは会長として、文化財の調査保護活動に大きな貢献をしている。また、『新編岡崎市史』の編集委員長も務めた。

◆ 山田 利一 氏

平成元年から、本格的に切り絵の制作に取り組み、小学校や市の施設などで切り絵の指導・普及活動に努めている。個展も開催し、多くの人々に感動を与えている。

◆ 磯谷 栄一 氏

平成八年から、伝統的なおもちゃや竹細工物の研究を始め、独創的な作品を製作している。小中学校や市の施設などで、講話や製作指導を精力的に行っている。

(団体の部)

◆ 常磐中学校 生徒会

昭和五十一年から土鈴や鬼面作りを始め、鬼まつりで販売し好評を得ている。収益金は福祉施設への寄付にあてるなど、自主的なボランティア活動に取り組んでいる。

◆ 光ヶ丘女子高等学校ダンス部

昭和六十二年の発足以来、年々活動の場を広げ、年間数十回の公演活動の他、「定期作品発表会」「クリスマスページェント」など、市民に夢と感動を与えている。



▲ 柴田市長より賞状を受ける受賞者

◎ 記念講演



▲ 鈴木宣之氏

● 表彰

◆ 東海ユース(U-15)フットサル大会
優勝 福岡中学校

◆ 県学校体育優良校

◆ 第二十三回県中学生バレー

ボール新人大会

優勝 竜海中学校

◆ 第四十五回小学校作文コンクール(CBC主催)

中目新聞社賞 根石小 四年 鈴木 崇達

◆ 第四十四回西三中学校英語スピーチコンテスト入賞者

六ツ美北中三年 林 智世

南 中三年 杉浦あがさ

◆ 第十八回県中学生英語弁論大会

優良賞 南中三年 杉本侑嗣

◆ 少年消防クラブ県表彰

最優秀賞「意見発表」
矢作北小六年 吉元 敦史

優良クラブ
小豆坂学区少年消防クラブ

代表 六年 折井 麻絵

優良指導者
井田学区少年消防クラブ

指導者 市川 満

◆ 第一回徳川家康作文コンクール
最優秀賞 竜美丘小六年 山田 諭

優秀賞 根石小六年 鈴木達三
常磐中三年 上田兼誠

◆ 明るい社会実践体験文

市長賞 矢作西小六年 花井美加子

◆ F・B・C秋花壇

学校花壇設計図コンクール

県知事賞 根石小学校

◆ 財団法人今枝愛林共生会による平成十六年度学校関係緑化コンクール学校林活動の部

優秀賞 秦梨小学校

◆ 第五十三回県中学校駅伝競走大会

男子 三位 東海中学校

五位 六ツ美中学校

六位 矢作中学校

女子 優勝 六ツ美中学校

二位 南中学校

六位 竜南中学校

※六ツ美中学校(女子)は、
全国大会出場(三年連続)



▲ 第53回県中学校駅伝(女子)

・カ
ツ
ト
六ツ美北中 早川周宏

臨海学習 (昭和25年)

写真提供：福岡中学校

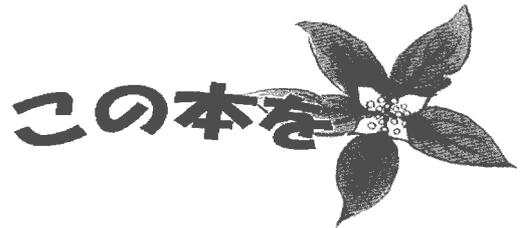
福岡中は昭和二十二年、学制改革により額田郡福岡町立福岡中学校として創立され、当初から臨海学習が行われた。写真は三年後の七月に幡豆海岸で撮られたものである。

当時は物資欠乏、食糧難の時代であったが、普段の学校生活では味わえない自然の中での体験は貴重なものであった。

その後、市内各校でプールが完成し、臨海学習はなくなるが、体験活動を重視するキャンプ宿泊訓練、スキー合宿などに姿を変えながら、今もその精神は受け継がれている。

フォトヒストリー

岡崎の教育



この本を

- *学校に行けない子どもと百倍楽しく過ごす
小森 さゆり ￥1900
- 新風舎
- *子どもの目線
尾木 直樹 ￥1800
- 弘文堂
- *困ったときの処方箋
赤坂 真二 ￥1600
- 学陽書房
- *ひきこもり
斎藤 環 ￥1800
- NHK出版

- *こころにポツと光をともし本 永崎 一則 ￥1300
- PHP研究所

現代社会は、物質的には恵まれていても、心は貧しいように思われる。心ないニュースが日ごとに報道され、残念に思うばかりである。本書は、そのような社会の中で、乾燥した人の心を優しく潤してくれる人の姿が記されている。

何気ない人の行為が、周囲の人にさわやかな人間的ぬくもりを与えてくれる。人との出会い、電車やバスでの出来事など日常の中でほっとする一場面。その人が特別な人でないだけに、より感動させられる。忙しさに紛れ、見失いがちな自分の生き方を再認識させられる。

オリオン座が夜空に輝く。凜とした星空の下、まるで勇者と張り合うかのように、一人の子供が星座の観察を続けている。

二十数年前、同じ体験をした。あの日の星の輝きや寒さを、今でも体が覚えている。子供に本物を学ばせられる本物の教師でありたい。

シオ スア

愛・地球博が開催される二〇〇五年が明けた。この万博が、明日を担う子供たちにどんな未来をもたらすのだろうか。

約一万二千年前に生きていたマンモスに出会えるのは楽しみだ。機械化されすぎた現代だからこそ、原始時代の生活を想像すると胸が躍る。

しめ縄を玄関に飾り、無病息災・家内安全を祈る。元旦の朝には、お屠蘇をいただき、おごそかに邪気を払うとともに、互いの健康を願う。

形を変えながらも、昔からの風習が現代に息づいている。こうした風習を通して、新年を迎える気持ちも改まってい

水洗トイレはもはや当たり前となつた学校のトイレだが、それでもなお「汚い、臭い、暗い、怖い」の4Kと言われている。

常磐中、梅園小のように、明るいトイレがすべての学校に設置され、子供たちが快適に使えるようになることを望んで止まない。